

輔仁会文化大会の三島由紀夫

——「扮装狂」「玉刻春」にふれつつ——

杉山欣也

- 一、初期三島研究における学習院
- 二、「扮装狂」
- 三、「玉刻春」
- 四、「やがてみ楯と」

(要旨)

作品研究・作家研究のいずれにおいても、当時在学していた学習院との関係から三島の初期が論じられることはほとんどなかった。こうした状況は後年の三島自身や近親者の発言に基づいており、作者や作品の成立基盤あるいはそれらを解釈するフレームを隠蔽する結果を招いている。この基盤あるいはフレームを再構成していく作業が、三島の初期を論じる際には必要であると考えられる。本稿では、学習院の文化祭である輔仁会文化大会に関する初期作品における表象を分析することによって、当初の積極的姿勢からやがて心はなれていくまでの三島の軌跡を浮き彫りにする。その軌跡は、戦時下における学習院の変容と期を一にするものであった。

一、初期三島研究における学習院

昭和六年四月、平岡公威、のちの三島由紀夫は学習院初等科に入学した。以来、太平洋戦争下の繰り上げ措置によって昭和十九年九月に高等科を卒業するまでの十三年半、三島は一貫して学習院に在籍した。一般的に、この年頃の少年の生活や精神形成において学校生活は大きな比重を占めているものだが、この間に執筆活動を始め、文壇デビューを果たした三島にとって、学習院が担った意味はけっして小さなものではなかったはずである。また、『仮面の告白』（昭二四・六 河出書房）、「詩を書く少年」（昭二九・八 『文学界』）など、学習院を舞台にした作品もいくつもある。だが、三島由紀夫における学習院の意味は、これまで深く考察されることがないまま放置されてきた。これは一見奇異なことのように思われる。

もっとも、それにもまったく考慮すべき事情がなかったとはいえない。それは、学習院を舞台とした三島の小説に、意外なほど日常的な学生生活が描かれていないことや、学習院時代について、三島自身に具体的な発言が少ないことなどが掲げられよう。十七歳から二十六歳にいたる文学的青春を語った「私の遍歴時代」（昭三八・一・一〇）五・二三『東京新聞』夕刊）は初期の三島を考えるととき示唆に

富む回想であり、ここで三島が当時の自身を「私は日本浪曼派の周辺にゐた」と発言している点は、三島の初期作品と日本浪曼派との関連を強調する多くの研究がよりどころとするなど、しばしば引用されている。だが、ここで三島は学習院を「学校内の文学活動はしばらくおく」とひとこととで片づけてしまい、学習院と自身とのかかわりをまったく語っていない。

ときに饒舌に、回想、エッセイの類で自己を語りつづけた三島ではあるが、このように、なぜか学習院に関する回想はあまり多くない。そのことと、これまで三島における学習院の意味が論じられていないこととの間には関連があると考えるべきであろう。三島研究の流れをみていると、三島自身の発言をあまりに重視しすぎるため、三島自身あまり発言しなかった事柄について考察の対象になっていないと感じることが多いが、学習院についてもまた同様といえよう。日本浪曼派との関連が過剰なまでに強調される一方で、学習院がほとんど調査考察の対象とならず、ややもすれば、華族階級の子弟のための学校で感じたであろうコンプレックスといった、検証不可能なゴシップ種の温床になってしまった原因の一端は、三島自身にもあるといえる。

三島の学習院時代に言及する際、しばしば引用される資

料に、肉親である平岡梓『倅・三島由紀夫』（昭四七・五文藝春秋）平岡倭文重『暴流のごとく』（昭五一・一二『新潮』）、あるいは当時の友人であった坊城俊民『焰の幻影 回想三島由紀夫』（昭四六・一一 角川書店）や三谷信『級友・三島由紀夫』（昭六〇・七 笠間書院）といった回想がある。三島研究、とくに評伝を中心に、こうした回想の類に記されたエピソードに依拠し、そこにみられる三島像をクローズ・アップして、少年時代の三島の人間像、あるいは精神構造などを分析する流れがある。

こうした回想の類は三島自身による発言の空白部分を埋めるものとして価値の高いものであるが、これへの安易な依拠はつつしむべきだろう。古い話であるが故の記憶ちがいなど、単純な勘違いも当然確認できるうえ、こうした証言が個人的に知り得た、いわば検証不能な回想であり、そこに描き出された三島像が読者に届くまでのいくつかのプロセスにおいて、さまざまなバイアスがかかっているためである。たとえば、三島自身による読者や肉親、友人たちに対するイメージ操作の可能性は否定できない。

また、そうしたできごとに対する証言者たちのコメントにも、さまざまな理由からそれぞれの思惑に従って記憶を語り、また意味づけを行うことが多いという問題がある。そこには、三島の死が衝撃的、センセーショナルなもので

あり、多くの謎を遺していることが影響していると思われる場合も少なくない。こうした回想の類は、近親者としてその謎を解きたい、あるいは死者の名誉を守りたいという思いから執筆が企てられている場合が多い。そのため、三島の死という時点から記憶の意味づけが再編されている可能性が高い。つまり、ここでも三島自身の撒いたイメージの束縛を免れないのである。それは、回想を語る者の執筆動機として尊重されなければならない態度ではあるが、第三者が安易に依拠すべき事柄ではないように思われる。

いずれにせよ、こうした回想の類は客観的に事実を検証する態度に欠ける傾向がある。そのため、こうした証言そのものへの批判的検討のプロセスを経ずに、三島を研究する者がそこに描かれているできごとや記憶への安直な依拠を行えば、それが研究としての妥当性をもちえないことはいうまでもなく、いわば検証不可能な三島伝説の再生産に墮する危険をはらんでいる。こうして、これまで三島由紀夫における学習院の意味への考察はおおむね表面的で、未検証のまま羅列されている。

くりかえしになるが、こうした研究状況は、先ほどみた三島自身の冷淡さを反映した結果といえよう。だが、『仮面の告白』（昭二四・七 河出書房）にみるように、三島が見られる自己に対して自覚的であり、生涯を通じてセン

セーショナルなイメージを意図的にまき散らしつづけた作家であったことを考えたとき、むしろその冷淡さに、なんらかの意図を考えてみることもできるように思う。ひよっとすると、学習院の学生としての作家活動は、後年の三島にとって隠蔽すべきものであったかもしれないのだ。ならば、そういう側面にあえて着目することで、作品なり作者なりに新しい解釈を見出すこともできるだろう。いいかえれば、いかにして三島自身の声から自由を獲得するかが、これからの三島研究の課題のひとつといえるだろう。筆者自身はといえば、やはり既発表・未発表の作品、内容の公表されている書簡、あるいは近親者の回想などを用いている。その際、『輔仁会雑誌』をはじめとする資料の記述を参照することで、できるかぎり客観性・妥当性を確保したい。また、安易に個人的なエピソードに依拠せず、三島がそこに生きていた文化的な場として学習院を扱い、その地平から三島の活動や作品を解釈した際にどういった意味を見出すことができるか、といった点を説明してゆく。これによって三島自身の声や三島伝説のたぐいから自由な態度を保つことができると考えている。

こうした問題意識に基づいて、本稿ではとくに輔仁会文化大会と三島の関係を論じてみたい。学習院は高等科までの一貫制であり、大学進学の内容も緩和されていた。受験

から自由であることから、学生は積極的に文化活動にいきむゆとりがあった。そのため、当時の学習院には独特の文化的環境が形成されていた。三島が学習院中等科に進学したのは昭和十二年四月のことだったが、それは同時に校友会である輔仁会への入会を意味している。輔仁会では年に複数回発行される『輔仁会雑誌』のほか、春秋二回の輔仁会大会の開催、各部主催の展覧会や演奏会、弁論大会や講演会、あるいは競技会と、さまざまな活動と交流の場があった。以下、こうした文化活動の華であった輔仁会文化大会を三島がどのように描いたかを確認したい。

二、「扮装狂」

生前未発表の三島作品に「扮装狂」という短編小説がある。これは、三島文学館に所蔵されている未発表原稿のひとつで、本文は『三島由紀夫没後三十年』と題して刊行された『新潮』臨時増刊号(平一・二・一一)に発表されており、田中美代子氏の解説(『黄金郷にて——未発表作品解説』)がある。松旭齋天勝の舞台への憧れから沢村宗十郎の顔立ちへの賞賛にいたる挿話群は、「仮面の告白」第一(二章の挿話と重なり合う部分が非常に多く、いわば『仮面の告白』のデッサンというべきエッセイである。末尾に「二九・八・一(一元)」と摺筆年月日が付されている点はそ

他の未発表原稿の多くと同様だが、この昭和十九年八月一日前後は、初期の三島由紀夫を考えるうえで注目すべき時期といえる。

このとき、三島は高等科の三年生。六月二十日の卒業試験で首席となり、九月九日の卒業式をへて十月の東京帝国大学進学を控えた夏期休暇のただなかであった。いわば人生における大きな節目の時を迎えていたといえる。また、ちょうどこのころ処女短編集『花ざかりの森』（昭一九・一〇 七文書院）の編集も進んでいた。前年に知遇をえた富士正晴の奔走によって徐々に具体化した、この第一創作集の出版企画は、この年の四月、正式に出版許可を得て一挙に現実味を帯びた。五月には住吉中学校に伊東静雄を訪ね、序文を依頼して断られるといった曲折を経て、ちょうど「扮装狂」擱筆の八月一日前後はその校了まぎわといった時期にあったと考えられる。

また、小説「夜の車」（のち「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」と改題）が掲載された国文学研究誌『文芸文化』終刊号の発行日が、ちょうど八月一日であった。三島は後年、そこに描かれたいくつかのモチーフに「後年の私の幾多の長編小説の主題の萌芽が、ことごとく含まれている」としてこの小説を高く評価した（『花ざかりの森・憂国』解説「昭四三・九 新潮文庫」。先行

研究の多くも、三島の作品史上の転換期を画する小説と位置づけている。雑誌の発行期日が実際に書店に並んだ日とはかぎらないにしても、この前後に三島の創作上の転機が訪れていたということはできるように思われる。

さらにこのときは、三島にとっては応召の現実味が増した時期でもある。さきに触れた五月の伊東静雄訪問は、本籍地の兵庫県印南郡志方村（現在の加古川市）で徴兵検査を受けて第二乙種合格となった翌日のことであったし、四月に進級した三島が六月に卒業試験を受けたのも、昭和十七年三月の文部省令「高等学校規程ノ臨時措置ニ関スル件」にもとづく措置であった。昭和十八年十月には文科学学生の徴兵猶予が停止され、昭和十九年以降、満十九歳が徴兵年齢とされたために、三島が兵役に赴く可能性は高まっていたのである。実際に三島のもとに赤紙が舞い込んだのは翌年の二月のことだったが、それでもまさに「戦争の只中に生き、傾きかけた大日本帝国の崩壊の予感の中にいた一少年」（前掲田中氏「解説」）にとって、その生死をも左右する大きな転機を迎えつつある夏であったといってもよいだろう。

「扮装狂」はそんな折に書かれたエッセイではあるが、一見そうした一少年作家の転機とは無縁な、「痴呆めいた閑文字」（前掲田中氏解説）が綴られているようにみえる。

その内容からは、松旭齋大勝と主人公自身によるその模倣、お祭りの行列、ジャンヌ・ダルクの絵、映画「フラ・ディアポロ」、花電車の運転手や地下鉄の改札掛などの挿話のうちの『仮面の告白』第一章に描かれている。また「ブラと仇名された四つも五つも年長の少年」は、近江と名を変えて『仮面の告白』第二章に登場する。

さきにも触れたように、このとき三島は学習院卒業をまぎわに控えた身であった。のちに『仮面の告白』で詳細に語られることとなる自己分析の萌芽がこのときなされたことは、三島の精神史を探るうえで興味深い。だが、ここで筆者が試みたいのは『仮面の告白』との比較ではない。むしろ、「扮装狂」には書かれながら『仮面の告白』には取り込まれなかった、輔仁会大会に関する一挿話の解釈である。以下にその箇所を掲げる。

学校には年に二度高等科から初等科までを合同した校友会の大会があつたのである。それはやがて僕らにもめぐってくる扮装の夢の実現に、唯一の期待と約束とを齎らすものであつた。最高級生の演ずる「リリウム」は、羨ましきの限りであつた。紫や赤や白や黄のリボンの役員賞をつけた役員たちの、急しうに小腰をかぎめて人混みを縫つてゆく様子の優雅だつたこ

とノ（僕は後年ある機会にその優雅をまねた。十分巧者に十分美しく。しかしあとで一友人は面と向つて残酷な評言を敢てした。「ちえッ、役員面しやがつて。なんだいあの尻つぴり腰は」扮装欲はつひに叶へられずに終つた。

「僕」の扮装欲の「唯一の期待と約束」をもたらず「リリウム」がモルナールの戯曲であることや、大会役員の学生がリボンによって識別されていたことはわかるとしても、これがいつのことであつたかは、「扮装狂」からはわからない。

輔仁会大会は春秋二回開催され、片方を文化大会とし、もう一方を遠足とするのが通例であつた。文化大会とは、現在一般的にいう文化祭にあたるものである。学習院院史資料室編『学習院百年史』（全三編、昭五五・三―六二・三）などを参照すると、昭和初期には春季大会を遠足会、秋季大会を文化大会として開催していた。当時のプログラムは初等科学生の唱歌、音楽部の管絃楽演奏のあと、プロの芸人による水芸や奇術、漫談などがあつた。昭和三年十月二十一日の開校五十周年祝典輔仁会大会では徳川夢声も出演している。そのほか、学生によるピアノ独奏や独唱、対話劇（註）と呼ばれる芝居が上演され、模擬店なども出て華や

かであったという。昭和八年にはじめて春（五月二十八

日）に文化大会が行われたが、このときには時局を反映して「連盟よさらば」「戦はこれからだ」（桜井忠温原作、真山青果脚色）といった対話劇が上演されている。その後、昭和十年にはふたたび文化大会は秋に移り、昭和十二年には時局を考慮して中止、かわりに時局講演会として桜井忠温、栗島狭衣の講演や海軍省の映画上映などが行われている。その後、昭和十三年にはふたたび春に文化大会が行われ、昭和十六年まで続いた。昭和十七年春は中止、秋に文化大会が行われたのち、昭和十八年六月六日に春季文化大会が行われたのを最後に、戦後まで行われることはなかった。三島の在学時は、戦争の影響によって時期や方針も一定せず、中止の危機にさらされながら、どうにかその命脈を保っていた時期ということができよう。それでも「扮装狂」を読むと、かなりにぎやかで華やかな印象が伝わってくる。「扮装狂」が描いた輔仁会大会はいつのものだったのだろう。

ここに『学習院輔仁会春季大会次第書』（以下『次第書』と略）と題されたパンフレットがある。B6版、十五ページの冊子と、B5版用紙一枚にプログラムだけを印刷し、二つ折りにしたチラシとの二種。いずれも「昭和十三年五月廿九日」の日付がある。同日に開催された輔仁会文化大

会の案内状である。

プログラムの別表に譲るが、初等科学生の唱歌・童話劇にはじまって、学生オーケストラの演奏、漫才、昼休みの余興、学生による奇術、ジャズ・バンド、ピアノ、落語、管弦楽に対話劇二本と盛りだくさんな内容に驚かされる。また、音楽部「軽音楽」の、冊子版の方に掲載されているメンバー表のピアノのパートに三島の名があることにも驚かされるが、とくに、文芸部・弁論部の合同で上演された対話劇のサブタイトルが「リリオム」であることに注目したい。冊子版の『次第書』に付された解説によれば、「リリオム」は『星を盗む話』（四幕五場）に附された副題で、モルナールの原作を文芸部員・坊城俊孝と酒井洋のふたりが改作したものである。先の引用部に「最上級生の演ずる「リリオム」は、羨ましさの限りであった。」とあるように、ここに三島やその同級生たちの名はない。

また、「扮装狂」に「紫や赤や白や黄のリボンの役員賞をつけた」とある役員章についてもこの『次第書』に記載されている。これによれば「紫や赤や白や黄」はそれぞれ、展覧会係・売店係・受付係・電気係を示す。どれも上級の学生が担当したものと思われる。また、「御注意」として「電話をお掛けになる時は受付係（白色）迄御申込下さい。」などの案内があり、この役員章や『次第書』が父兄など来

賓・来客向けのものであったことは間違いない。

「扮装狂」に輔仁会大会が語られていることは、三島の文学的精神形成において学習院が一定の役割を果たしていたことを示唆しているかのようである。『仮面の告白』第一章の、いわゆる「第二の前提」に通じる扮装への期待が輔仁会大会のにぎやかな雰囲気を通じて醸成されていたことは注目されてよい。同時に、昭和十九年の学習院卒業時の三島において、そろそろ戦争の影響を受けはじめていた昭和十三年の輔仁会大会が、華やかな印象とともに追憶され、描写されたことを確認しておきたい。

だが、一方で、なぜこの挿話が『仮面の告白』に採用されなかったのか、という点について考えておく必要があるだろう。それは、河出書房の書き下ろしシリーズの一冊として不特定多数の読者を対象に小説を執筆したとき、この輔仁会大会にまつわる追憶が了解不能となるおそれが大きい、という判断が働いたためであろう。もちろん、制約の少ない書き下ろし長編小説において解説の煩を避ける理由はない、という考え方も成り立つわけだが、「扮装狂」が学習院卒業時に書かれた作品であることを考えるならば、作者・三島が想定する読者層のちがいととして考えた方が、より適切であるように思われる。つまり、三島は初期に、読者層として学習院の教官・学生を意識し、そういう読者

に通用する言葉で小説を書いていた時期があった、そしてそれは三島が作家として名声を獲得してゆく過程で置き去られていったのだ、ということである。また、三島自身もこうした基盤の上に立って作品を書いていた一時期があることを、「学校内の文学活動はしばらくおく」といった形で隠蔽してしまったのではないか。この点については本稿末尾でも少し考えてみたい。

三、「玉刻春」

もうひとつ、三島が輔仁会大会を舞台に選んだ小説に「玉刻春」（昭一七・一二『輔仁会雑誌』一六八号）がある。「玉刻春」は五十枚弱、上下二編に分かれている。ほとんど改行がない作品だが、用紙の制限によるものであることが『輔仁会雑誌』の誌面からうかがえる。

「七、八年ばかりまへの都」の話。「学校の記念日のため」に戯曲を書いていた学生・桂郁哉は、友人・花小路敏岑の邸で稽古を行い、その姉と知り合う。公家で公爵家、母方は武家であった花小路は、父親が亡くなったために若くして爵位を継いでいる。郁哉は花小路の姉に恋文を書くが、姉は拒絶する（以上、「上」）。月日が経った。花小路は盲腸をこじらせて急死しており、郁哉は少壮の国文学者となっている。師とともに絵巻を拝借しに訪れた花小路家

で、郁哉は彼女と再会する。姉は、拒絶の手紙が花小路の懇願によって書かれたものであり、花小路がそのことを苦にして死んでいったことを告げ、「八年間おしたひ申しつけてをりました」と告白し、郁哉もそれを受け入れる（以上、「下」）……というものである。

建礼門院右京大夫の一首「夕日うつる梢のいろのしぐるゝにこころもやがてかきくらすかな」をエピソードに据え、古今集・草根集・上田秋成と幾多の短歌を織り込みながら「八百年にちかひ年月を経てきたこの優雅な絵巻」とふたりの恋を重ね合わせ、ふたたび建礼門院右京大夫で締めくくる手法は優雅で、「降る月光の下、萩の庭に立つ佳人の後姿は、夢幻的な雰囲気に含まれて、妖しいまでに美しく、流れゆく筋のなだらかさ、豊富な形容の調和とは、その中に歌と詩とを盛つて、官能的な短篇として完成してゐる」と評される（新井高宗「編輯後記」、『輔仁会雑誌』一六八号）にふさわしい気品をもった小説といえる。とくに、末尾の建礼門院右京大夫「恋ひわびて書くたまづさの文字の関いつか越ゆべき契りなるらむ」は本作のプロットを要約するかのような一首で、いわば一編の歌物語として構想された作品とみることができよう。

だが、ここで筆者が試みたいのはこうした歌物語としての作品構造の分析ではない。ここでふたりが出会うきっかけ

けとなつた「学校の記念日」の芝居の意味を問題にしたのだ。それは、明らかに学習院の学生と思われる人物を登場させ、輔仁会大会の対話劇とおぼしき芝居の練習風景から物語がはじまることに、三島と学習院の関係を考える上で大きな意味があるように思われるからである。また、当時三島はすでに学外に雑誌『文芸文化』という発表媒体をもっていた。にもかかわらずここで『輔仁会雑誌』を掲載誌に選んだ理由もそこから推測できる。以下その点を論じてゆく。

問題となる箇所を確認してゆこう。郁哉は花小路邸で行われた芝居の稽古で、花小路の姉と知り合う。

戯曲は学校の記念日のためのものであつたが、何がしの学生は演出までひとりですとめた。その席は舞台からやゝはなれてゐる。姉はかたはらの椅子にかけられた。にこやかに古風なほほゑみをうかべて見物してゐる。「この芝居いかゞでせう。」「結構でございますね。」さういつて柔和にほゝゑむばかりである。

この姉を「きれいな人だと思」つた郁哉を、花小路は夕食に誘い、ふたりを引き合わせるのだが、その芝居とは、

その芝居といふのは秋成の「仏法僧」を一幕にまわめて稚ない色付けをしたものであった。学校の仮舞台ではおもふやうな効果は出なかつたが一夜の幻のありさまは多少うかがはれた。幻たちの起居にはずいぶん心を砕いたのである。

というものであった。芝居は成功に終わり、二、三日して花小路の姉から手紙が届く。その文面は、

『秘密の山』御成功のよしおよろこびまをしあげます。さきに御作を拝読いたし宅にておけいこのことも之有、なかなか拝見いたしたく存じてをりましたものの、宅の取込にて果たせませず残念に存じをります。亡父秋成のものがたりが好きにてこどものころよりよみきかされましたゆゑ今もをりをり雨月などひもといてたのしんでをりますが秋成のうたにも『早苗とるなり』や『行くさ来さはなれぬ駕のふすまには霜の枯葉もなれゆかにして』の一首など亡父がよく口ずさんでゐたものでございました。弟の申しますことに国文のはうへおいでなされますとか、をこがましきやうなから何とぞおはげみ下さいますやう。まずはおんよろこびまで。かしこ。」

というものであった。「ちやうど杜若の出をまつたときのやうな気持で」この手紙を読んだ郁哉は、その「意味のありかさへあるかなきかの文面」に苦しむことになる。『行くさ来さ』の歌に恋慕の情の隠喩を認めていいかどうか悩むのである。一週間ほどして郁哉は「もの狂ほしいやうな気持にかられて花小路の姉に長い手紙を書き、やはり手紙で拒絶されてしまうのである。

これまでのところ、三島に「仏法僧」を脚色した脚本は発見されていないが、ここで『雨月物語』の一話が素材に掲げられている意味を、もう少し考えてみる必要があるように思われる。それは、『行くさ来さ……』の短歌を導くための措置であつたと、一応はいうことができる。だが、三島自身の『雨月物語』への思い入れと、「玉刻春」執筆当時、現に三島が取り組んでいた戯曲との落差という二点を考慮に入れるとき、その暗示するところは意味深いように思えるのだ。

まず、三島の『雨月物語』および上田秋成観を検討しておこう。三島は、「雨月物語について」（昭二四・九『文芸往来』）というエッセイで「戦争中どこへ行くにも持ちあわっている本は、富山房百科文庫の「上田秋成全集」であつた。」とする。秋成は「日本のヴィリエ・ド・リラダン」のごとき「苛烈な風刺精神、ほとんど狂熱的な反抗精神、

暗黒の理想主義、傲岸な美的秩序。加ふるに絶望的な人間

蔑視」があり、「白峯」と「夢応の鯉魚」を最上位とし、その次に「菊花の約」「仏法僧」を置いてある。そこで強調されるのは、秋成が「人間の本来の悲惨の風刺」によって西鶴に迫り、「この批評と風刺を、次いで象徴の領域にまで高めた」こと、そしてその社会風刺の次元を高めて「作品の存在そのものの抗議プロテストの形をとつて、人間性へ対置」するに至ったことである。それは、「モラリストと美学者との結婚」であつたとする。このエッセイでは「仏法僧」についての具体的な記述はないが、「仏法僧」において三島が見出した「批評と風刺」の象徴化とは何だったのであろうか。

「仏法僧」は、隠居の印に名を夢然と改め、旅寝を老いのたのしみとする僧侶と、息子の作之治が高野山で一夜を明かし、豊臣秀次一行の亡霊と遭遇する、といった筋立てである。諸家によって指摘されている事柄であるが、「仏法僧」は太平の世の謳歌から語りだすことで、秀次一行と遭遇する高野山の夜の世界を対比的に浮き彫りにしている。秀次一行は、修羅の時に至り「忽ち面に血を灌ぎし如く、「いざ石田・増田が徒に今夜も泡吹せん」と立ち去る。秀次は死後もなおいくさのただなかにおり、太平の世に「彼の旅寝を老いのたのしみとする」夢然と対比されている

のである。

末尾に引用された『建礼門院右京大夫集』そのものが、平家滅亡の折に死に別れた恋人への追慕の念に満ちたものであつたことを思うとき、ここに「仏法僧」が引用されることによつて、閑雅な物語にひそむ戦争の影を「玉刻春」にもまた読みとることができるよう思うのだ。つまり、太平洋戦争のただ中であつて「玉刻春」のような閑雅な物語を紡ぐ行為そのものを、現実社会に対する「批評と風刺」たらしめようとしたモチーフを「仏法僧」の引用に見出すことができるのである。

四、「やがてみ楯と」

ついで、「玉刻春」執筆当時の三島が取り組んでいた戯曲について触れておこう。実は「玉刻春」の郁哉同様、三島も「学校の記念日のため」に戯曲を書き、演出もつとめている。それが対話劇「やがてみ楯と」である。B4葉半紙、ガリ版刷り十一枚の台本が三島文学館に所蔵されている。作・平岡公威。演出・音楽の箇所は空欄になっており、舞台効果の担当者として新井高宗、大岡忠輔、三谷信、本野盛幸の名がみえる。台本に記述はないが、昭和十七年十一月十四日の秋季文化大会で上演されたらしい。

作品は二幕四場。初夏のある日、春川友信は学校の防空

演習に熱をおして参加したために卒倒し、意識不明となつてしまふ。彼は三年も休学していたのだが、「我々一人一人の忠義——一度だつて防空演習を忍せにしては」という

気持ちから参加したのだ。彼は遠のく意識の中で「演習をつづけてくれ」とうわごとのように言い続ける。その言葉に、他の学生も胸を熱くする。それ以来学内が「目立つて緊張してきた」、その礼を言い同級生たちが見舞いに来る。友信は友人に、自分がそうして学内に影響を与えたことにとまどいを示す。来年度徴兵検査を控えた友信は「お国につくす」ため、体を鍛える決意を訴える（第一幕）。
浅春の一日、弓道の対抗試合が開催された。春川は奇跡的にわずか一年で体を鍛え、すでに検査で甲種合格になっている。弓道部「期待の綱」に成長した春川の活躍で対抗試合は勝利を収める。秋、入宮のために故郷へ帰る船に乗船する春川をみおくる学生たちは、日本の大きさと美しさを実感する（第二幕）、というものだ。

設定は学習院とみてさしつかえあるまい。病気で三年も休学していた学生が一年で弓道部のエースになるまで回復するというストーリーには無理があるが、みづから鍛錬し「やがてみ桶と」なるという意図はみやすい。また、三年間の休学には現役の高等科学生が出征する設定にするため時間稼ぎとしての意味があるといえよう。

本文を引用してみよう。病に倒れながらも「忠義」を体現した春川に、友人たちは礼を述べる。

E 「そればかりか上級生も一昨日ひらいたクラス会の際に、君のあの意気を模範にして、我々も負けぬ様の大いにやらうとクラス中で決議をしたのださうだ

C 「嘘のやうな話といふかも知れないが、一週十近い遅刻や欠席のあつた一年のある組があつた日からこの方長い病気の人を除いて一人も遅刻なく欠席なしといふ成績で先生もおどろいてゐられるのだ。

B 「[中略] 表にあらはれたる事実よりも僕は皆の中にみなぎり出したなにかあるふしぎな力におどろいてゐるのだよ。[中略] 春川、僕たちは冗談でなしに君にお礼を——君の真心の行ひに対して、憚りながらもさ、かの真心のお礼を云ひたい為に代表になつて上つたわけなんだ。

こうした台詞をみれば言うも愚かなことだが、本作の創作意図はもちろん観客である学習院の学生に対する愛校心と国威の発揚にある。そのために「防空演習」「弓道部」「甲種合格」「入宮」といったできごとが場面に選ばれているのはいふまでもない。三島自身は文芸部員で、のちに第

二乙種合格となり、実際の入隊検査に際して肺浸潤を疑われて不合格、即日帰郷となったことを思うと皮肉な筋立てといえようか。だが、この芝居が上演された輔仁会大会と「玉刻春」の執筆時期がきわめて近かったことを考えたとき、なぜ三島は輔仁会大会に「仏法僧」のような幻想的な芝居を上演せず、このように陳腐な作品を上演したのだろう、という疑問が浮かぶ。その点を検証してみたい。

昭和十七年、輔仁会文化大会は大きな計画変更を余儀なくされている。春季輔仁会大会の中止である。『輔仁会雑誌』一六八号（昭一七・一二）「会務報告」欄には次のようにある。

大東亜戦争下、従来の如く華かなる大会は勿論出来ないが、内容も時局に即応した質実乍らも楽しい大会を行ふべく種々準備中の処、四月十八日の帝都初空襲に鑑み、大会を行つて学生に慰安を与へる事よりも、国家的見地からみた場合、この戦争下早急になさねばならない多くの仕事に今更乍ら気付き、我々は急遽それに没頭せざるを得なかつた為に、止むなくも春季大会を中止するに至つた。故に大会中止の理由を後ればせ乍らこゝに述べて諸君に謝す。

だが、その代替措置として秋季文化大会が十一月十四日に行われた。この日の模様は『輔仁会雑誌』一六八号および戦時下最後の『輔仁会雑誌』である一六九号（昭一八・一二）に、まったく記載されていない。編集時期の関係から脱落してしまつたか、あるいは春季大会の経緯から考えて、時局に鑑みて遠慮するところがあったのだろうか。

『学習院百年史』も内容不明としている箇所であるが、松本徹編『年表作家読本三島由紀夫』（平二・四 河出書房新社）、安藤武『三島由紀夫「日録」』（平八・四 未知谷）には「三島作・演出の芝居が上演された旨の記述があり、後者には「み旗の影に」というタイトルと、三島が当日を欠席、後日「芝居を見て泣いていた奴がいた」ことを聞いて感激したというエピソードが記されている。おそらくこの「やがてみ楯と」のことであろう。

この翌日、十一月十五日付けの東文彦あて書簡（平一一・一一『三島由紀夫十代書簡集』新潮社所収）には「きのふの十四日は輔仁会大会のかはりの文化大会といふものをやりました。芝居を禁制されたうめあはせです。文芸部の名目で高二の松井さんが「船弁慶」の能をやりました。」とあり、「やがて御楯と」についてまったく触れていない。相手の東は学習院文芸部の先輩で、結核のため昭和十六年頃より療養生活に入っていてながらく休学中であった。三

島は完成した作品をまず東の元に送り、東の批評を受けて改稿することもたびたびであった。また、当時すでに同人誌『赤絵』をともに発行していた。いわば文学的な盟友であり、通り一遍の接し方をした友人ではない。にもかかわらず、『十代書簡集』に公表された東あて書簡を見るかぎりでは、欠席したことはおろか、三島が自作を上演したことじたい一切触れられていない。

実は、三島はこの輔仁会大会で「やがてみ榎」とは別にもう一本、対話劇を演出、上演しようとしていた形跡がある。三島は昭和二十一年二月十日付け神崎陽あて書簡（終戦直後の三島由紀夫書簡「平一・七『文学』」のなかで、「漢籍に長ずるときく山梨院長が、戦時中の輔仁会で翻訳劇を上演しようとした僕の意図を抹殺し」たと記している。この文面からはいつの輔仁会大会であったか不明だが、東あて書簡に「芝居を禁制された」とあることを考えると、「やがてみ榎」と同日のことではなかったであろうか。先述『次第書』や『輔仁会雑誌』の記述を見ると、輔仁会大会では二本の芝居が上演されていた。はたしてどんな「翻訳劇」を三島が企画したのかは不明だが、そちらは許されず、もう一本の「やがてみ榎」との方は上演された、ということになる。あるいはこの「翻訳劇」が上演を許されなかったために、急遽「やがてみ榎」に差し替え

たものか。

開明派で知られ、戦後の学習院存続に尽力した院長・山梨勝之進にあってなお、戦時下の輔仁会大会において翻訳劇を上演することのはばかられる情勢であったことは改めて論証するまでもないだろう。先述の『次第書』に明らかにように、輔仁会大会は父兄や近隣住民の来場を前提としている。とすれば、ことは学習院内部の問題では済まない。翻訳劇の上演に院長が待ったをかけることは、当然の措置であったと考えるべきだろう。

こうした状況を考えると、「扮装狂」や「玉刻春」に描かれた輔仁会大会の華やかな雰囲気や、戦局の悪化によってかなり失われていたことはまちがいない。この日の文化大会そのものが空襲によって中止を余儀なくされた春季大会のかわりに行われたものであったうえ、学習院においても、実際に防空演習や教練などさまざまな戦争の影響から、それまでの教育カリキュラムが大幅に変更されていた時期に当たる。「翻訳劇」の上演を禁じられた三島は、そうした時局や学内の一部の傾向に迎合して「やがてみ榎」を創作した。もちろん、長らく病氣療養中であった学生が一念発起して、一年で甲種合格を勝ち取るといった筋立ては、結核で苦しんでいた東に対して語るべきことではあるまい。そういった配慮もここにはあったはずだが、文学に

ついでなんでも語り合えたはずの東に対する書簡に一言も言及がない理由のひとつに、その出来映えそのものと、そこにいたる過程が本意であったことがあるのではないだろうか。さらに想像を逞しくすれば、当日に欠席したと伝えられているのもやはり同じ理由からと考えるべきだろう。「芝居を見て泣いた奴がいた」ことを聞いて、三島は本当に感激したのだろうか。

そうなると、まさに同時期、「玉刻春」に「仏法僧」を引用した意味は次のように考えることができよう。それは、「七、八年ばかりまへの都」であれば上演可能であった『秘密の山』を忍び込ませることで、輔仁会大会の理想像を『輔仁会雑誌』に刻み込み、それによって三島はひそかに溜飲を下げたのではないか。編集長としてみずから自由を守り得る立場にあった『輔仁会雑誌』であったからこそできた、ひそやかな抗議であったといえよう。ともあれ、「扮装の夢」に胸をふくらませた三島が「羨ましきの限り」でみつめた「リリオム」のような芝居は、昭和十七年における輔仁会大会においてはもはや過去のものとなっていたのである。昭和二十年四月十三日には、輔仁会大会の開催された学習院正堂も空襲で焼失することになる。「扮装欲はつひに叶へられずに終った」のである。

ところで、三島は戦後しばらくの時点まで輔仁会大会に

おける演劇活動に対して深い思い入れがあったらしい。三島は戦後初の輔仁会大会（昭二一・二・二〇）にも来場し、先の神崎陽あて書簡に長大な感想を記しているほか、演劇研究会第一回発表会（昭二一・八・三一〜同九・一）に際しても助言を与えている^⑤。だが、この神崎あて書簡にみるように、三島は徐々に戦後の輔仁会大会と、学習院そのもののありように対して複雑な感情をいだき、やがて離れていったようだ。それが、戦後の三島において学習院における活動を隠蔽させた原因のひとつと考えられる。

「扮装狂」についてのまとめで、筆者は「リリオム」に関する挿話が『仮面の告白』に採用されなかった点について、三島はみずからの作品の依って立つ文化的基盤、読者論的にいいかえれば読みのフレイムとしての学習院を置き去り、隠蔽したのではないか、という仮説を提示した。それは、「玉刻春」を『三島由紀夫十代作品集』（昭四六・新潮社）や『三島由紀夫全集』（昭四八・四〜五一・六 新潮社）を用いて読む場合にもつきまとう。こうした書籍の刊行は、より多くの読者に初期作品を提供するうえで大きな役割を果たしたが、一方では学習院という文化的基盤のうちでは了解された言葉づかいや創作モチーフを無自覚のうちで隠蔽し、了解不能なものとしてしまった、という結果をも招いている。いかえれば、これらの作品を『仮面

の告白』で名声を獲得したのちの作家・三島由紀夫の名のもとに還元する結果をも生んでいるのである。ならば、後年の三島自身の発言に安易に依拠するのではなく、作品の成立時に立ち返り、その依って立つ基盤ないしはフレームを再構成してゆく作業が、三島の初期作品を論じる際には必要とされるのではないだろうか。

注

- (一) 『学習院百年史』第二編(昭五五・三三)によれば、「対話劇」とは、「衣装を付けない劇のこと」という。
- (二) 本『次第書』は平成十二年十二月、神田古書祭に際して三茶書房店頭に展示されたものと同じものである。
- (三) 『学習院輔仁会春季大会次第書』(昭二三・五・二九)より、番組のみ列挙しておく。開始時刻は九時。
- 午前之前部

開会之辞：会務委員／童話劇及唱歌：初等科／挨拶：会長／会歌斉唱：会員／軽音楽：音楽部／休憩十分／少年寮々歌斉唱：少年寮々々生／昭和寮々歌斉唱：昭和寮々々生／二人漫談：学生有志

休憩 十一時三十分ヨリ

職員泥鰌掴み／伝書鳩競鳩／化学の驚異／桜虹会展覧会／伝書鳩展覧会／野試合

午後之前部 一時ヨリ

奇術：学生有志／ジャズピアノ／独奏：先輩／休憩十分／ジャージングバンド：学生有志／落語：先輩／休憩廿

分／管絃楽：音楽部／講談：神田伯龍／休憩五分／統弥次喜多：昭和寮々生／休憩十分／リリオム：学生有志／閉会之辞：会務委員／万歳三唱
終了予定 五時四十五分

(四) 『学習院百年史』第二編によれば、ジャージング・バンド Jaring Band とは「バカ囃子」を山田巖教授が英訳したもので、昭和七年に高等科一年の有志によってはじめて演奏されて以来、文化大会の名物となったものである。

(五) ただし、この表記は三島の同級生でのちに音楽家となった平岡通博氏の誤記である可能性もある。この点については未確認。

(六) 坊城俊周「戦後演劇ルネッサンス 喝采のうちに幕は上がる」(平八・二『立春大吉』私家版)

付記

本稿を成すにあたり、幡野武夫氏所蔵の資料を引用させていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。